

序

北尾宏之先生には、二〇二三年三月をもって定年の期を迎えられます。立命館大学人文学会は、先生のこれまでの御功績を称え、深い感謝の意を表するため、ここに退職記念の論集を編んで献呈させていただくこととしました。

北尾先生は、京都市生まれで、一九八〇年に京都大学文学部哲学科をご卒業後、京都大学大学院文学研究科哲学専攻に進学され、修士課程を経て、一九八五年三月に同後期課程を単位取得満期退学されました。同年四月より一年間日本学術振興会奨励研究員・倫理学を務められたあとに、京都外国語大学外国語学部非常勤講師となられ、一九八七年より同大学外国語学部専任講師、一九九四年には同助教教授となりました。そして一九九六年に立命館大学文学部哲学専攻に助教教授として就任され、二〇〇二年に教授となられました。以来、本専攻での倫理学的な役割を担う先生として、そして幅広い研究領域の専攻教員をまとめられる重鎮の一人として活躍されてきました。学内行政でもご貢献いただいております、専攻主任はもちろんのこと、二〇〇二年四月より二年間学部副学部長を、二〇〇九年には文学研究科長を務められました。そして二〇一二年には立命館大学図書館長を務められ、全学に貢献されました。

先生の研究領域は、カントをはじめとするドイツ哲学とそれに系譜する倫理学です。価値観が多様な現代において善悪や正義を議論するのにいかなる根拠によって語りうるのかという問題に、カントの道徳哲学および倫理学説を手掛かりにして取り組んでいらっしゃいます。これらの領域に関する先生のご業績は別紙にあるとおりです。

哲学は世界最古の学問といわれていますが、ある意味であらゆる学問につながっているのではないのでしょうか。私が専門とする文学の分野でもデリダやフーコーの理論が援用されていますし、医学をはじめとする現代の諸問題を論じる際に倫理学は欠かせません。そこで私は哲学・倫理学専攻の先生方には一目おいております。なかでも北尾先生は、関西風の物腰の柔らかさ、哲学者らしい品位より、文学部の良心を体現される方だと思います。教授会での先生の穏やかな口調での、的を射たご発言には溜飲が下がったものです。

研究室がお隣ということもあり、会議等以外でもお顔をみる機会が多かったのですが、コロナ禍になってめったにお目にかかれなくなりました。そのようななか、昨年一度だけですが、帰りのバスで一緒に帰ることができました。私にとっていい思い出です。

北尾先生は、これまで人間研究学域哲学・倫理学専攻において、教育・研究を通して数多くの優秀な教育者・研究者を育成されてきました。その先生のご退職は、文学部にとっても本学にとっても大きな損失です。先生にはご退職以降、授業を担当されなくても引き続き立命館大学、文学部・文学研究科へのご鞭撻を賜うことができれば幸いです。

二〇二二年一二月

立命館大学文学部長

中 川 優 子